A-3. ヒマワリを助けよう！
刈谷市立かりがね保育園（愛知県刈谷市）

［4歳児］

保育者の願い

子どもたちが好奇心を抱いたものに対して、より深い興味を抱き、『どうなるのかな？』『こうしてみようか』『きっとこうなるよ』『やっぱりこうだったね』『咲いたよ！』『実がなったよ！』など、よく見たり、考えたり、期待したり、調べたり、感動したりすることができるような豊かな体験をして欲しい。その過程の中での子どもたちの気付きや発見が学びとなり、感動の心がその学びをさらなる意欲や創造性へと結びつけてくれると信じる。また、地域の方や保育者や友達、給食調理員、保護者など、いろいろな人とのかかわりの中で、感謝の気持ちや思いやりの心を育てたい。

事例1　「センターのおじさん　ありがとう」　5月10日

一ツ木福祉センターの方に（児童施設と老人福祉施設がある、園から徒歩15分）今年も「ヒマワリの苗があるよ」と声をかけていただき、4歳児が「もらいに行きたい！」と意気込んで出かけた。

センターの方が持っている苗を見ると「すごい！」「かわいいね」「これ、ヒマワリなの？」「花が咲くのかな？」と言いながら大事そうに袋に入れた。

「大事に育ててね」と言うセンターの方に「分かりました！」「お水いっぱいあげるもん」「おじさん、ありがとうございました！」と答え、喜んで持ち帰った。

園へ戻るとさっそく育てる場について話し合った。「毎日、みんなが見やすい場所がいいね」と保育者が言うと、「お部屋の前は？」「水のそばは？」「門の横のところ」などいろいろ出た。門を入ってすぐ横の木々の茂みで「やっぱ、ここがいいな！」とみんな賛成し、決まった。

「触るとふわふわだから、ぎゅって持っちゃダメだよ」と言う女児の声に「わかっとる！」と普段は元気な男児も丁寧に苗を扱っていた。

その後、毎日外へ出て遊ぶ時間になると、水をかけたり、様子を見ては「ちょっと大きくなったかな？」「はっぱがたくさんになってる！」など楽しんで世話をしていた。

考察

人との温かいかかわりを通して、いただいたものを大事に育てようという気持ちが育っていることが、苗を植える時に丁寧に大事そうに植える子どもの姿に現れている。

事例2　「年長さん、ふまないで！」　5月16日

「先生！たいへん！」「ヒマワリが折れてペッチャンコになってる！」と大慌てで子どもたちが呼ぶ声のもとに行くと、ヒマワリが折れていたり、根元から横になっていたりという無残な姿があった。

「せっかく大きくなったのにね」とA児がヒマワリの苗を触りながら言うと、「大きくなったのにね、悲しいね」と周りのB児やC児も悲しそうな表情で言った。保育者も子どもの肩を抱きながら「伸びてきたのに悲しいね」と共感した。思いついたようにC児が「もしかしたら、年長のお兄ちゃんたちかも…だってこの前も虫を探しとったもん」するとその横のD児も「そっか、その時ふんじゃったのかな？」「草だと思ったかもよ」「知らんで踏んじゃったんじゃない？」と周りの子どもたちも口々に言う。保育者が「そうだね、ヒマワリが植えてあることがわからなかったかもね…どうしよう？」と子どもたちの顔を見回すと、E児が「年長さんに言ってきたら？」F児が「言ってからさあ、看板立てればいいじゃん」と提案し、みんなで年長組さんに「ヒマワリの花壇に入らないでね」と言いに行ったり、牛乳パックで文字や絵を書いて保育者と子どもたちで看板を作ったりした。

〈門の横の木々の茂みの場は、今年、虫捕りを自由にできるようにと思い、5歳児と保育者で中に入れるようにと、半日かけて大きなプランターを動かした所であった〉

この日福祉センターに、もう一度苗をもらいに行く。

ヒマワリの他にヘチマやひょうたんなどいろいろな苗を見せてもらい、「はっぱの形もいろいろ違うんだね」と気付く子どもがいた。

センターの方にお礼を言い、園へ持ち帰って次の日に植えた。また、固い土を一生懸命に掘り、周りに囲いも作った。

考察

日々、大きくなってきたヒマワリを見ていただけに、踏みつぶされた様子を見たのは、かなりショックだったと思われる。しかし、この体験が子どもたちに、どうしたらいいのかを自ら考えようとするきっかけとなった。そして、**ヒマワリを大事に思う気持ちは、考えたことを実際に行動に移すという力になった。**

事例3　「はっぱが前よりもすごく大きいよ」　6月8日

柵を立ててから、自分たちのヒマワリという意識もあり、保育者が誘わなくても毎日のように水かけをしている子どもたち。水道とヒマワリの花壇を何度も行き来しながらいろいろな言葉が聞かれた。「先生、はっぱが増えてる！1・2・3・4…16枚だよ」と数に驚くE児、「はっぱが前よりもすごく大きいよ」と大きさに興味をもつF児、「いつ花が咲くのかな？」「明日咲きそうか

な？」と、花の開花に期待するG児やH児。毎日見ている中での気付きは子どもによってもいろいろである。関心が薄かった子どもたちも、次第に気になって、見たり、水かけをするようになった。

考察

自分たちのヒマワリと感じて愛着をもつことができる子どもたちは、毎日水をかける中で、**ヒマワリの変化に気付くようになっている。**葉っぱが増えていることや背丈が大きくなっていることなどの発見を保育者が共感することで、さらに子どもの思いや期待もふくらんできた。

事例4　「よし！ヒマワリを助けよう！」　7月17日

台風4号が去った次の日、ヒマワリが倒れているのを発見した子どもが「先生！ヒマワリが倒れてる！」と叫んでヒマワリに駆け寄った。「ウソー、どうして？」「やだー」と口々に言った。保育者が「ほんとだ、あんなに背が伸びたのにね。どうして倒れちゃったのかな？」と子どもたちに返すと、子どもたちは「台風だよ」「そうそう、台風だ」「だって昨日、すごい風と雨だったもん」とすぐ応えた。「先生の家も、ビュウビュウってすごい風の音だったよ･･･はっぱはどうなってる？」と聞くと、茎の部分を指差して「折れてるよ！」「元気ないね」と泣きそうになって言った。保育者が「ほんとだね、たくさんの雨や風にやられちゃったんだね･･･どうしたらいいかな？」と子どもたちに投げかけると、A児が「それなら、棒がいいじゃん。ヒマワリの隣りに長い棒を立てれば？」E児も「棒ない？先生！ひもで縛ればいいもん」と興奮して、「あそこは？」と倉庫の方へ走り出した。「よし！ヒマワリを助けよう！」とA児も走り出すと、みんなも二人について走った。倉庫を探しても棒が見つからない子どもたちは、園長先生にヒマワリが台風で倒れた話をして、支えるための棒が欲しいことを伝えた。園長先生から「みんな優しいね･･･きっとヒマワリさんもありがとうって言ってると思うよ。何本いるのかな？」と尋ねられたので、みんなで8本いることを確かめて園長先生に伝えた。午後に、折れた8本のヒマワリを棒で支えた。

考察

ヒマワリに起きた5月の**アクシデントをみんなで乗り越えていけたという経験があったことが自信になって、**台風という突然のアクシデントでも、子どもたちにどうしたらいいのか、考えようとする姿につながった。

事例5　「こんなに背が高くなってる！」　7月26日

日々生長するヒマワリに毎日水をかけながら、自分よりもだんだん高くなっている様子に驚き「あれ！こんなに背が高くなってる！」とF児は自分の背と比べる。「すごいね、だってセンターでもらった時は、こんなにちっちゃかったよ。不思議だな…」とG児も両手で小ささを表しながら言った。「ほんとにすごーい！」と茎を触ると「あっ痛い！」と手をひっこめた。「なんかが出てる」と茎をよく見ると「なんかいっぱい毛みたいなのが生えてる！」「ほんとだ」とみんなで茎を見たり、触ったりした。「そっと触れば痛くない！」「ほわほわしてる！」「でもチクチクする感じ！」など、それぞれの感触を言葉にして周りの友達や保育者に嬉しそうに伝えた。その後、はっぱも細かい毛が生えていることに気付き触って遊ぶ姿や、友達に知らせに行く姿が見られた。

考察

自分たちにとって身近なものになるほど、よく見たり触ったりするようになることが分かった。また、触った感触は子どもそれぞれに違うので、個々に合わせて共感することが大事である。5歳児くらいになると、調べてみようという気持ちもでてくるかもしれないが、4歳児の『不思議だな』という気持ちや触った感触などが、5歳児になって探究心をもっていくことにつながっていくのだと思われる。ヒマワリのように1日の生長が早いものは、変化に敏感な4歳児が育てるものとして適していると思った。

事例6　「咲いたよ！見て見て！」　8月7日

背はどんどん高くなってもなかなか咲かないヒマワリに、「まだかな？」「つぼみはあるよね」「いつ咲くのかな」と子どもたちは心待ちにしていた。この日、母親と一緒に登園してきたG児は、一番背の高いヒマワリが咲いているのを発見し、職員室へ走ってきて「咲いたよ！見て見て！」と叫んだ。「きれいだね」と園長先生が思わず言うと「うん！すごくきれいで大きいでしょう」と胸を張って言った。4人はしばらく無言でヒマワリに見入っていた。母親も「本当にきれいですね･･･なんだか癒やされますよね」と笑顔で言った。G児は「早くみんなにも知らせてくる！」と興奮した様子で急いで保育室へ走っていった。

考察

登園してすぐに目に入る門のそばで栽培していたことから、生長の変化もすぐに母親や保育者と共感できた。毎日水かけをしたり、草取りや肥料やりなどしながら世話をしてきたことが、まるで自分の子どもを自慢する親のような口ぶりで「うん！すごくきれいで大きいでしょう」と胸をはって言うG児の姿につながったのだと思われる。

ポイント

子どもたちは**苗を植えて毎日水をあげるだけではなく、生長や変化を観察して、困ったことがあったら自分たちがそれを解消してあげるという栽培の経験を重ねています。**地域の方からいただいたということ、保護者も一緒に成長の喜びや変化に共感していることは、大事に育てるための要因や心の支えになっています。そのため、**アクシデントがあっても、相談し協力してヒマワリの世話をして乗り越え、自分たちで栽培する責任や大輪を咲かせた充実感を味わうことにつながりました。**